

日本語母語話者における韓国語の連結語尾「고 (ko)」と「서 (se)」の学習について

金 智英

神戸松蔭女子学院大学文学部

Author's E-mail Address: chiyon1218@yahoo.co.jp

A Study on the Korean Conjunctive Endings "고 (ko)" and "서 (se)" for Native Speakers of Japanese

Kim Jee-young

Faculty of Letters, Kobe Shoin Women's University

Abstract

本研究は、対照言語学の観点から、日本語母語話者の韓国語学習に効果的な学習方法の提案を目的としている。その中で、本稿は日本語のテ形の意味機能と類似した文法項目である韓国語の「ko」と「se」を取り上げ、日本語母語話者の誤用や韓国語テキストの内容を参考にしながら問題点を整理し、効果的な学習方法について考えた。当該文法項目の学習を困難にする原因には、二つの連結語尾の機能が類似していること、テ形と「ko」・「se」の対応の複雑さ、それぞれの連結語尾が結合する動詞の性質などが複合的に関わっている。特に継起や付帯状況といった意味機能において、当該文脈の内省が難しいことや、テ形との対応関係が複雑であることが当該連結語尾の学習を妨げる原因として考えられる。本稿では、これらの問題を整理したうえで、初級や中級における学習に必要な情報は何かを選別し、学習者に明確に提示できる学習展開を提案する。

This study proposes an effective method for Japanese native speakers to learn Korean from the perspective of contrastive linguistics. This paper focuses on Korean ko and se, grammatical items with similar semantic functions to the Japanese te-form. It summarizes the problems with these items and proposes an effective learning method with reference to the error of these items by native Japanese speakers and the content of Korean texts. There are a few reasons for the difficulty in learning these grammatical items, namely the similarity of function of the two conjunctive endings, the complexity of the correspondence between the te-form and ko and se, and the nature of the verb

to which each ending is bound. In particular, the lack of introspection on the context and complexity of their correspondence with the te-form in semantic functions such as succession and incidental situation are considered the main hindrances to learning which ending is to be used in a particular case. This paper proposes a method of learning development in which the information necessary for learning at the beginner and intermediate levels is selected and clearly presented to learners.

キーワード：誤用分析 学習展開案 再帰性 知覚動詞 かたまり表現

Key Words: error analysis, learning development plan, reflexive uses, perception verbs, chunks

1. はじめに

まずは、次の例をご覧ください。韓国語中級レベル¹⁾の学習者4名（日本語母語話者）の自由作文から一部を引用したものである（日本語訳は筆者による）。

- (1) 노랫 소리가 아름답고 (→아름다워서) 감동했습니다.
a-lum-tap-ko²⁾ (→ a-lum-ta-we-se)
歌声が美しく感動しました。
- (2) 영화 늑대 소년을 봐서 (→보고) 진실의 사람을 느껴 보지 않았어요?
bwa-se (→ bo-ko)
映画オオカミ少年を見て真実の愛を感じて見ませんか。
- (3) 식사 습관과 예절에 대해서 3 개 항목으로 나누고 (→나눠서) 조사하겠다.
na-nwu-ko (→ na-nwe-se)
食事習慣と礼儀について3つの項目に分けて調べることにする。
- (4) 슬퍼서 (→슬프고) 안타까워서 (→안타깝고) 따뜻한 이야기에요.
sul-phe-se (→ sul-phu-ko) an-tha-kka-we-se (→ an-tha-kkap-ko)
悲しくて、切なくて、暖かい物語です。

本稿では連結語尾に注目しているので、その他の誤用に関しては訂正しないで原文のまま提示している（以降、同様）。連結語尾³⁾の部分に誤りが見られる部分を太文字にしており、発音を表したローマ字表記ではイタリック体がそれに該当する。いずれも、右側の括弧に訂正された語形を合わせて示した。例(1)から例(4)に見られる誤用は、いずれも「고(ko)」と「서(se)」(以降、「ko」「se」とする)という、日本語の接続助詞「テ」形(以降、テ形とする)に該当する連結語尾に関わるものである。「ko」と「se」は韓国語の基本的な文構成に欠かせない連結語尾であるが、それぞれ複数の意味を持っているだけでなく、両方が類似した文脈に出現することもある。さらに、上の例から分かるように、韓国語を学習する日本語母語話者の発話や作文にはテ形の影響と見られる誤用も多く見られる。

本稿では、このように複雑な側面を持つ連結語尾「ko」と「se」を取り上げ、特に日本語母語話者にとって効果的な学習方法を探っていく。まず、「ko」と「se」それぞれに固有な意

味機能を定義したうえ、日本語との対応関係を明確にしておく。次に、学習者による誤用の傾向を確認し、日本語母語話者の学習において必要な情報は何かについて考察していく。

2. 「ko」と「se」の意味機能

2.1 辞典における意味機能

詳細な文法記述が施されている『朝鮮語大辞典』と『標準国語大辞典』から、「ko」と「se」項の基本用法に関する解説を確認する。

表1：辞典に記述されている「ko」「se」の意味機能

	『標準国語大辞典』	『朝鮮語大辞典』
「ko」	①二つ以上の事実を対等に並べる連結語尾 ②前後節の二つの事実の間に継起的な関係があることを表す連結語尾 ③前節の動作が行われ、そのまま持続されるなかで、後節の動作が起こることを表す連結語尾	①(二つ以上の事実または互いに相反する事実を並列するとき用いて) …し、…して、…しく、…しくて ②(二つ以上の事実を並べて言うとき、その後にくる動詞に先立って行われること、後に来る動詞の根拠・理由になることを表して) …し、…して ③(ある行動の結果生じた状態をそのまま持続しつつ他の事を行うことを表して)
「se」	①時間的な先後関係を表す連結語尾 ②理由や根拠を表す連結語尾 ③手段や方法を表す連結語尾	①(時間的に先行することを表して) …して(から) ②(動詞の語幹について次にくる行動の方式となることを表して) …して ③(理由・原因・根拠を表して)

二つの辞典の解説を見ると、語義分類の順番や表現に違いはあるが、「ko」は並列、継起、持続を、「se」は時間的先行、原因・理由、手段・方法の意味を表すとされる。辞典の解説からは、二つの連結語尾の意味に明確な区分があるようにも捉えられるが、その運用基準の記述には曖昧なものが多い。これについて、上掲の『標準国語大辞典』の例を挙げて詳しく見てみる。

- (5) 할머니께서는 상한 음식을 드시고 (tu-si-ko) 탈이 나셨다. <継起>
お祖母さんは傷んだ食べ物を召し上がってお腹を壊された。
- (6) 하도 전화를 걸어서 (kel-e-se) 이제는 내 목소리를 알아듣는다. <原因・理由>
あまりにも電話をかけて(電話の相手は)声を聞くだけで私だと分かる。
- (7) 어머니는 나를 업고 (ep-ko) 병원까지 달려가셨다. <持続>
お母さんは私を負って病院まで走られた。
- (8) 짐을 양손에 나눠서 (na-nwe-se) 들었다. <手段・方法>

荷物は両手に分けて持った。

それぞれの文脈を吟味すると、二つの連結語尾の意味機能は文脈の捉え方によって違った解釈も可能なことが分かる。例えば、例(5)は継起とされているが、(6)と同じ原因・理由として解釈することもできる。また、例(7)は持続の意味とされているが、(8)と同じ手段・方法とも解釈できる。それぞれの意味機能が当該語尾の固有性を表しているとは言い難く、外国語として韓国語を教える際にも二つの語尾に関する解説が曖昧になりやすい傾向にあることは否めない。二つの語尾はどのような基準で使い分けられているのか。次節では「ko」と「se」の運用に関わる曖昧さについて、先行研究を参考に整理していくことにする。

2.2 「ko」と「se」それぞれの固有性

先行研究において「ko」と「se」がどのように分類されているのか、いくつかの研究から当該連結語尾の意味機能を表す部分だけを表2にまとめた。

表2：先行研究に記述されている「ko」「se」の意味機能

	「ko」	「se」
ユン (2011)	対等、順次	限定 (場面、時間、手段・方法、様態) 因果
キム・トンス (2011)	羅列、順序	順序、原因・理由
チョン (2011, 2012)	羅列、同伴、強調、反復、継起、方法、理由	継起、持続、手段・方法、背景、原因・理由、目的
ユ (2016)	羅列、順序	順序、原因・理由
パク・チョン (2016)	羅列、継起、手段・方法	原因、継起、持続

「ko」を対等・順次に、「se」を限定・因果とするなど、二つの連結語尾を相互排他的に捉えるものもあるが、表全体としては二つの連結語尾の間に共通項を設けている場合が多い。それぞれの意味機能の分類における共通項からは、「ko」は羅列 (並列、対等)、「se」は原因・理由を固有な意味素性として捉えていることが分かる。すなわち、先行節と後行節の関係から考えると、「ko」は二つの事象を個別に捉え、対等に並べる語尾として、「se」は二つの事象を緊密な関係性をもって繋げる語尾として位置づけることができる。「ko」の意味に理由・原因を設定しているものもあるが、これについてナム・キシム (1994) は、「ko」は羅列の意味だけを持っており、その他の意味は文脈的解釈、すなわち語用論的推論によると主張している。確かに、原因・理由や手段・方法の意味の「ko」は、基本的に「se」に置換することが可能で、その場合、方法や原因の意味がさらに強くなる。例えば、次に示す (9) や (11) の「ko」はいずれも「se」に置き換え可能である。

- (9) 이유를 제시하고 (cey-si-ha-ko) 상대를 공격하였던… (チョン 2011,p216) <方法>
理由を提示して、相手を攻撃したので…
- (10) 창홍은 걸어서 (kel-e-se) 고향으로 돌아왔다. (チョン 2012,p418) <方法>
チャンホンは歩いて故郷へ帰ってきた。
- (11) 그의 글을 읽고 (ilk-ko) 생각이 달라졌다. (チョン 2011,p225) <理由・原因>
彼が書いたものを読んで考えが変わった。
- (12) …정이 들어서 (tul-e-se) 서운해 한다. (チョン 2012,p410) <理由・原因>
…情が移って淋しがっている。

以上から、原因・理由、方法といった意味は「ko」の機能による結果ではないことが分かる。内山(1999)にも、「ko」の場合、文脈による解釈が存在するだけで文法的な意味は認められないとしている。一方で、解釈による結果だとしても「ko」が持つとされる幾つかの意味が一定の範疇内にとどまることを考えると、語用論的な推論を経て文法化されつつあるものと見なすことも可能である(ク 2016)。

本稿では、「ko」の固有性を二つの事象を個別に捉える機能に置き、「se」の固有性を二つの事象に緊密な関係性を持たせる機能に置くことで、それぞれ「羅列」と「原因・理由」「手段・方法」という相互弁別的な意味要素を持つと設定する。そのうえで、表1や表2を参考に、両方に共通する意味機能を暫定的に捉えておく。

表3: 「ko」と「se」の相違点と共通点

	固有な意味機能	共通する意味機能
「ko」	事象間の個別性： 羅列	順次、継起、様態、持続など
「se」	事象間の緊密性： 理由・原因、手段・方法	

2.3 「ko」と「se」に共通する意味機能

まず、共通する意味機能の例を、先行研究からいくつか引用し、二つの語尾が同じような意味機能を持っていながら、文脈の意味を保つためには互いに置き換え不可能であることを確認しておく。

- (13) 버스를 타고 (ta-ko) 학교에 갔다. (パク・チョン 前掲, p175) <継起>
バスに乗って学校に行った。
- (14) 사과를 씻어서 (ssis-e-se) 학교에 갔다. (パク・チョン 前掲, p177) <継起>
リンゴを洗って学校に行った。
- (15) 아이들을 안고 (an-ko) 나무 밑에 모여 있었다. (チョン 2011, p216) <持続>
子ども達を抱いて木の下に集まっていた。

- (16) 내내 창가에 앉아서 (anc-a-se) 산을 바라보며 지냈다. (チヨン 2012, p413) <持続>
 ずっと窓際に座って山を眺めながら過ごした。

主節と従属節の関係が緊密である場合、基本的には「se」が相応しいことは前述の通りである。そうすると、上記のような継起や持続といった文脈において「ko」が見られる現象に疑問が生じる。鄭 (2001) は文脈的な解釈による分類ではなく、動詞のアスペクト性と語尾との結合関係から連結語尾の機能を分析しているが、その中で、「ko」と接続する動詞の属性に触れている。個々の文脈への解釈には同意しにくい部分があるが、注目したいのは「ko」を取ることで様態⁴⁾、継起を表すとされる動詞類である。原文は韓国語に日本語が併記されているが、日本語のみを引用しておく。

<様態>

(手に) 持つ、(口を) つぐむ、連れる、(目を) 開く、(肩に) かける、お連れする、(腕を) 開く、履く、(体を) 乗せる、被る、抱く、背負う、かがめる、着る、(表情を) つくる、乗る、(腰を) 伸ばす、(~な顔を) する

<継起>

聞く、(傷を) 克服する、信じる、見る、考える、安心する、落ち着く、推し量る、知る、理解する、(幻影を) 消す、(期待を) 持つ、感じる

(鄭 前掲, p8-9)

様態と継起に現れる二つの動詞類からは、次のような傾向が読み取れる。「ko」の形で様態の意味となる動詞類は、動作の結果が主体に及ぶ再帰性⁵⁾を持つもので、継起を意味する動詞類は、再帰性を持つものと主体の心理的な変化を表すものが含まれている。連結語尾「ko」と再帰性との関係については、他にも崔 (2018a) やパク・ソヨン (2000) にも同様の指摘が見られ、特にパク・ソヨン (2000) は「ko」と結合する用言が広義の再帰性 (身体動詞、所有動詞、着用動詞、位置関係動詞、同伴動詞、心理動詞) を持つとしている。この再帰性という特徴が「ko」の使用に関わる重要な属性であると考えられる。

統語論的な制約について分析している内山 (前掲) は、「ko」節について、否定形、他動詞で主体変化動詞、主体非変化動詞の自動詞 (「寝る」「遊ぶ」など) といった特徴を挙げている。そこに主体変化動詞として「連れる」「乗る」「履く」など再帰性を持つ動詞が提示されていることにも注目したい。

その他、テキスト分析による研究の結果からは、動詞の自他性が当該連結語尾に関わっている可能性が垣間見られる。具体的には、「ko」に使用された上位 20 位までの動詞は全て他動詞で、「se」に使用された上位 20 位のうち 16 個の動詞は自動詞であったと報告されている (キム・トンス 2011)。

先行研究における議論を踏まえ、「ko」と「se」の意味と運用上の基準について大まかにまとめておくことにする。

一、二つ以上の事象が独立して対等につながる際には「ko」の使用が相応しい。

二、二つの事象が緊密な関係にある場合は「se」の使用が相応しい。

三、主節と従属節が緊密に繋がる場合でも、再帰性を持つ動詞、主体非変化の自動詞、否定形の場合は「ko」が使用される。

3. 日本語との対応

韓国語の連結語尾「ko」と「se」は、その意味機能においてテ形とかなり類似している。日韓両言語における類似性は、学習者が互いの言語をより効果的に習得できる正の転移として働くことが多いが、それと同時に、母語の規則を過剰汎化して誤用を招く負の転移も起きやすくなる。1章で引用した例(1)から(4)も、日本語のテ形の運用に影響された負の転移の結果であると考えられる。本章では、日本語との対照を通して、日本語母語話者が「ko」と「se」を学習する際に必要な情報は何かを抽出していく。

テ形の意味機能については様々な観点から少しずつ異なる分類があるが、『日本語文法ハンドブック』(庵 他 2001)によると、テ形は「付帯状況」「手段」「継起」「原因・理由」「並列」の5つの意味を持つとされる。この中で、付帯状況と同様の文脈を表す用語として、前章で取り上げた研究では持続、様態といった用語が用いられているが、以降、全て付帯状況に統一して記述する。

さて、上記の分類に従ってテ形と「ko」と「se」を対応させると次のようになる。ちなみに、テ形に対応する韓国語の連結語尾は他にも存在するが、理由の「ni-kka」等、特定の意味に特化したものがほとんどであり、本稿の対象から除外する。

<付帯状況> → 「ko」「se」

<手段> → 「se」

<継起> → 「ko」「se」

<原因・理由> → 「se」

<並列> → 「ko」

この中で手段、原因・理由、並列の意味においては、テ形に「ko」と「se」が一对一の対応を見せており、学習がそれほど困難ではないと思われる。一方、付帯状況と継起はテ形に「ko」と「se」の両方が対応することになるので、運用面の注意が必要となるうえ、そもそも付帯状況や継起といった文脈に対する内省が少々難しい。このような、テ形と当該連結語尾の対応関係から予想される学習上の困難については、先行研究でも度々触れられてきた。

永原(2017)も、テ形が根本的に持つ概念上の難解さに触れ、それが日本語母語話者の「ko」と「se」の誤用にも影響する可能性を指摘している。そして、テ形を「並列」「時間的継起(先行・順序)」「起因的継起(原因・理由)」「きっかけ」「付帯状況(同時進行・手段・方法)」と分類し、この「きっかけ」を韓国語の「ko」と対応させている。「きっかけ」とは仁田(1995)の「契機」を言い換えたもので、時間的継起と起因的継起の間に位置し「知覚・認知によってえられた情報・現象を刺激として導き出される」(仁田 1995, p109)ものを意味する。確

かに、「きっかけ」を設けることで「ko」を取る動詞との関連性が予測できるので日韓対照に有用な観点であると思われるが、文脈の解釈に左右される側面が強く、学習者のための基準とするには少々曖昧になりやすい。

継起と付帯状況におけるテ形と「ko」「se」の対応関係について、崔（2018b）はテ形を並列、原因・理由、付帯、継起の4つのタイプに従って分類し、とり分け継起を主節の意図が従属節より先に働く「認識的継起」と、従属節から主節へ単純に時間的生起順に述べられる「時間的継起」の2つに区分している。その中で、知覚動詞を用いた構文では認識的先行の働きがない時間的継起になると言及しているが、これは主体の心理的变化を表す動詞類が連結語尾「ko」を取る現象の説明になりうる。

以上のような研究結果を参考にテ形と「ko」「se」の対応関係を整理していく。本稿は初級から中級の韓国語学習を想定しており、特に日本語母語話者にとって初級段階では日韓の言語類似性が有効に活用されるべきであると考えている。従って、提示される対応関係は、学習者の内省を妨げないこと、そして「ko」と「se」の固有性を明確にすることが重要な条件となる。以上を反映し、本稿では前掲の『日本語文法ハンドブック』を参考に、テ形を次のように捉えることにする。

表4：テ形に対応する「ko」と「se」

	テ形	基本対応	有標的使用
意味機能	並列	「ko」	
	原因・理由	「se」	
	手段・方法	「se」	
	継起	「se」	※再帰性動詞、知覚動詞など →「ko」
	付帯状況	「se」	

付帯状況と継起において、有標的な使用の「ko」を合わせて表示している。ただ、文脈の意味を考えると継起に知覚動詞、付帯状況に再帰性動詞がそれぞれ出現するだろうと予測できる。ちなみに、継起と付帯状況の場合、基本的な対応関係とともに有標的使用を設けているが、その導入においては複雑な文法現象の解説を避ける学習方法の工夫が必要と思われる。効果的な学習モデルについては、5章で取り上げることにする。

表4の特徴は、誤用を防ぐための基本的な基準を提示するところにある。「ko」が文脈によって原因・理由や手段・方法の意味に解釈できることは前述の通りである。ただ、学習者が文を作り出す際に必要な情報は、目標言語の特定項目が何を意味するかではなく、意図する文を表すためにはどの項目が使用できるかである。特に、初級段階の学習者に提示される体系はなるべく単純なものが望ましいと考え、原因・理由や手段・方法として解釈される「ko」など、語用論的な部分については対応関係から除外した。

学習が進むほど母語の影響は弱化し、学習者の中間言語体系も目標言語の体系に近づいて

いく。そのような段階になって初めて「ko」と「se」が表す様々な文脈的な解釈が学習者の運用体系において意味をなしてくるものと思われる。

4. 韓国語学習場面における「ko」と「se」

4.1 韓国語テキストに見られる「ko」と「se」

本節では、韓国語テキストにおける「ko」と「se」の導入と展開について、先行研究を参考に実際のテキストの内容を確認してみる。その際、韓国で出版され、語学研修機関などで使用されているテキストと、日本で出版され、日本の大学などで使用されているテキストを分けて見ていくことにする。韓国で使用されているテキストは、会話中心の内容構成が多い傾向にあるが、日本語母語話者の韓国語学習を想定して作られたテキストは、日本語との対照を前提とした文法説明が多くなされている。後者は、日韓両言語の類似性を活用することが、特に成人学習者の文法理解を助ける有効な手段である実情を反映したものと思われる。

まず、全体の文法項目を網羅した研究として、カン（2017）は韓国の語学教育機関で使用するテキストを対象に、主要な文法項目を談話機能別に整理し、類似機能を持つ文法項目をグループ分けしている。その中の語尾項目の分類に、連結語尾「고」と「서」は時間表現（前後関係）として分類されている。韓国語教育において当該表現が時間的前後関係を表すものとして位置づけられ、学習されていることが分かる。

韓国の大学付属の語学教育機関で使用されているテキスト5種類を調べているキム・ドン（2011）からは、初級において「ko」が羅列と順序の意味を持つと学習されていることが分かる。一方、初級段階において「se」は先に継起が取り上げられ、詳しい解説とともに多くの例文で文脈理解が促されている。

同様に韓国の大学機関が出版したテキストを分析したキム・ソンミ（2017）は、「ko」と「se」がともに初級段階に導入されながらも、相違点と類似性の説明がないまま個別に扱われる傾向があるとし、二つの連結語尾を比較しながら先行節と後行節の関係を解説する必要性を指摘している。

ここで、韓国で出版されている『楽しく学ぶ韓国語1』を取り上げ、実際にその内容を確認してみる。会話能力の向上に重点を置く構成であるが、継起を表す「se」の文脈的な意味を「ko」と比較しながら説明している。

このテキストでは、初級の段階で二つの連結語尾を順序（継起）の意味として取り上げており、「se」が持つ理由・原因の意味は後続の『楽しく学ぶ韓国語2』で扱われる。しかし、「ko」の場合、固有な意味機能である羅列は後続テキストでも学習されない。同様の傾向は、先行研究で取り上げられたテキストにも見られているが、学習項目に含める意味機能の選定や展開について再考の余地があると思われる。

表5：『楽しく学ぶ韓国語1』における「ko」と「se」

	「ko」	「se」
導入	8課（全12課） 32番目（全48文型）	9課（同左） 34番目（同左）
意味	順序	順序
説明	行為の順序	先行節と後続節は密接な関係 先行節と後続節の主語は一致
特徴	以下、p.112の引用（下線とローマ字表記は筆者による） 친구를 만나고 /man-na-ko/ 영화를 봤어요 （友だちに <u>会って</u> 、それから映画を見ました：友だちと一緒に映画を見たとは限らない） 친구를 만나서 /man-na-se/ 영화를 봤어요 （友達に <u>会って</u> 映画を見ました：友だちと一緒に映画を見た）	

日本語母語話者を対象としたテキストでは、当該連結語尾がテ形の意味を基準に展開される傾向が見られ、専門課程になると網羅的な学習も行われる。例えば、孫（2005）によると、大学の一般的な外国語コースのテキストの場合、「ko」は並列、「se」は理由の意味で学習されるが、副専攻コースなどのテキストでは、「ko」は付帯、継起、並列、「se」は継起、原因・理由、付帯の意味へと展開される。

一方、崔（2018a）は日本の大学などで使用されるテキストにおいて、継起の「ko」と「se」の比較解説が十分でないだけでなく、当該連結語尾の導入や内容もばらつきがあると指摘している。そして、韓国語母語話者の使用頻度を反映し、初級の段階で「ko」（並列）→「ko」「se」（継起）→「se」（原因・理由）の順に学習することが望ましいと提案している。ただ、これに関しては韓国語の連結語尾をどう理解するかといった側面の他にも注意を向ける必要がある。すなわち、日本語母語話者の場合、継起などの文脈におけるテ形の使用を既に行なっている訳で、そのような直感的使用を内省できる説明がまず必要であると考ええる。

ここで、日本の大学で使用されている韓国語のテキストから、継起の「se」（テキストの用語は先行動作）が扱われている『ハングルの扉』（盧 他 2014）を取り上げてみる。

表6：『ハングルの扉』における「ko」と「se」

	「ko」	「se」
出現	7課（全8課）	8課（同左）
意味機能	順序、羅列	原因・理由、先行動作
説明	順序立てて表す、 動作や状態を並べる	理由と先行動作のどちらを意味する かは、文の前後関係で決まる

初級テキストでありながら意味機能を体系的に取り上げており、「ko」から「se」に学習が進むように工夫されている。ただ、二つの連結語尾の相違点について明示的な説明がなく、「se」の二つの意味を同時に導入することによる学習負担も大きいと考えられる。

参考までに、二つの語尾を比較する内容を含むテキストに『パランセ韓国語 中級』もあるが、初級段階のテキスト（『パランセ韓国語 初級』）では当該連結語尾が導入されていない。中級では1課で並列・順次の「ko」、2課では理由と継起の「se」が展開される。「ko」と「se」の明示的な比較解説はないが、二つの連結語尾から文脈に相応しいものを選ぶ問題が設けられている。このような学習は指導教員の解説に左右される部分が多いので、テキストに何らかの基準が提示されるべきであると考えられる。

以上、韓国と日本で出版されている韓国語のテキストの中で「ko」と「se」がどのように扱われているのかについて概観した。次節では、実際に日本語母語話者による当該語尾の誤用例を確認し、学習に困難を覚える部分について、また必要な学習内容は何かについて考えていく。

4.2 韓国語学習者に見られる「ko」「se」の誤用

韓国語学習者の作文に見られる「ko」と「se」の誤用は度々指摘されてきており、重要な問題として位置付けられている（李 2004；孫 2005；印 2016；キム・ソンミ 2017）。

孫（2005）は、韓国語を学習する日本語母語話者の作文資料から「ko」と「se」の使用頻度と誤用率について詳細に分析している。基本的に、「ko」を原因・理由に拡大使用した誤用が最も多く、二割ほどが継起への拡大使用であった。一方、「se」は、原因・理由、継起、付帯状況の意味と同程度の一割から二割ほどの誤用があるとされる。その全てが再帰動詞や知覚動詞（知る、聞く、見る等）であることから、前述の再帰・知覚動詞と「ko」の関係が想起される。なお、全体的に「ko」の誤用が「se」より多く見られる。

キム・ドンス（2011）は、誤用が見られる従属節の動詞に注目して分析しているが、やはり「ko」の誤用が「se」の場合より割合として多い。さらに、「見る」と「乗る」は初級から上級にかけて使用例の全てが誤用であったことが報告されている。「みる」「乗る」などは初級レベルの語彙であり、使用頻度も高いので、早い段階で正しくインプットされるべきである。

一方、永原（2017）は日本の大学で韓国語の初級を一年間履修した学生を対象に、日本語の提示文を韓国語にする作文と、文脈に合うように「ko」と「se」から選択する2種類のテスト調査を行っている。特に判断が難しい継起の文脈で正答率が高い文があったが、それについては学習によるインプットが影響した可能性が言及されている。調査方法としては結果に影響を及ぼす変数の調整が検討されるべきであるが、反復学習によって語形選択が慣習化する可能性が予見され、学習モデルを考える手がかりとなる。なお、2回目の選択テストでは、理由に「se」形を、並列に「ko」形を選択する問題の正答率が高く、きっかけ⁶⁾と付帯状況の意味における誤答が多かったことから、やはり文脈判断の難解さが誤用に影響することが分かる。なお、これまでの傾向と同様に「ko」を拡大適用した誤用が多い。

ここで、選択テストで誤答が多かったものの中から、付帯状況ときっかけの場合を次に引

用してみる (永原 2017)。

- (17) 化粧をして面接を受けに行く。 → 「ko」付帯状況
 (18) 雄大なスケールを見て驚いた。 → 「ko」きっかけ
 (19) 私は化粧を落とさないで寝た。 → 「ko」付帯状況
 (20) 椅子に座って友達を待っている。 → 「se」付帯状況

例 (17)「化粧をする」と例 (18)「見る」は再帰性、例 (19)は否定形がそれぞれ意図された設問である。例 (20)は付帯状況であるが自動詞「座る」が「se」を取ることがポイントとなる。このような文脈においては、表4のように「se」を基本と設定し、有標的な使用として「ko」を位置付け、個別の動詞や文脈を認知していく方向性が有用であるように思われる。なお、「見る」「座る」などは、学習レベルに関係なく継続して誤用が見られることや誤用率も高いことも指摘されている (キム・トンス 2011)。

では、実際に日本語母語話者に多く見られる誤用にはどのような動詞が見られるのか、先行研究から、「ko」と「se」間の誤用が見られる動詞をリストアップして確認した⁷⁾。並列や理由・原因の文脈は除外している。

「se」の使用による誤用

보다 (見る)、듣다 (聞く)、타다 (乗る)、먹다 (食べる)、마시다 (飲む)、
 입다 (着る)、일싸안다 (抱き合う)、주다 (あげる / くれる)、하다 (する)、
 가다 (行く)、자다 (寝る)、찍다 (撮る)

「ko」の使用による誤用

가다 (行く)、나가다 (出ていく)、내려가다 (降りていく)、다녀가다 (訪れていく)、
 하다 (する)、사다 (買う)、쓰다書く、오다 (来る)、나오다 (出てくる)、되다 (なる)、
 만나다 (会う)、만들다 (作る)、들어가다 (入る)、내다 (出す)、챙기다 (用意する)、
 앉다 座る、일어나다 (起きる)、서다 (立つ)、찾다 (探す)、숙이다 (屈む)、속이다 (騙す)、
 운동하다 (運動する)、돌아가다 (帰る)、보내다 (送る)、모이다 (集まる)、빌리다 (借
 りる)、
 내리다 (降りる)、놀라다 (驚く)、화나다 (怒る)、고르다 (選ぶ)、통하다 (通じる)、
 진열되다 (陳列される)、끓이다 (沸かす)

「se」の使用による誤用は出現動詞の種類が少なく、「食べる」「着る」「聞く」「見る」などの再帰動詞や知覚動詞などが目立つ。一方、「ko」の使用による誤用の場合、出現する動詞は種類も様々で使用数も多い。このように「ko」の誤用が多い傾向は多くの先行研究に共通する特徴である。

以上から、特に継起と付帯状況等の文脈における「ko」と「se」の使い分けは、「ko」に焦

点を合わせて指導する方が効果的であると考えられる。パク・チヨン（2016）は、初級段階の学習者のために二つの連結語尾がそれぞれ取る特定動詞のリストを提示している。例えば、「ko」は「(帽子を) かぶる」「(服を) 着る」などの身体脱付着動詞と結合すると提示される。特に「se」について「[ko]と結合する動詞とは違って、その大体の範囲も決められない程度に意味が散発的」で、「特定動詞を初級段階学習者が記憶するように強調して指導することが望ましい」（パク・チヨン 2016, p184）としている。これは、前述のような学習者の誤用例の傾向とも一致しており、本稿でも同様の所見で学習展開を考えていく。

ここで、本節で取り上げた学習者の誤用の傾向を次のようにまとめておく。まず、基本的な使用においては、文脈と使用語形の間を単純化することで回避できる誤用が多い。すなわち、初級では「ko」を羅列の意味として明確に提示するだけで、多くの誤用は解消できるのではないと思われる。次に、少々複雑な様相を持つ有標的な「ko」の使用においては、ほとんど再帰性の意味を持つことが分かる。さらに、初級段階で使用される動詞は予測できるものが多く（「着る」「見る」「食べる」など）、集中的な反復学習が可能と思われる。一方で、再帰性を持つが学習者には判断が曖昧な動詞もある。上記の動詞例からは、「타다（乗る）」⁸⁾、所有動詞として再帰性が認められる「주다（あげる/くれる）」（鄭 2001）、自動詞で主体非変換動詞「자다（寝る）」（内山 1999）などがそれである。これらについても学習者の使用が予測でき、かつ頻度の高いものをかたまり表現として取り入れることが有効であると考えられる。その他、再帰性動詞と混同しやすい姿勢変化動詞「일어나다（起きる）」「앉다（座る）」「서다（立つ）」も、動詞の種類が限られており、「se」と結合したかたまり表現として導入することが効果的であろう。

4.3 補足資料分析

本節では、筆者の手元にある作文資料を通してこれまでの傾向を確認し、補強されるべき課題について考えていく。資料の内訳は、次の通りである。

- ・対象者：大学2年生～4年生 172名（延べ数）
- ・韓国語学習時間：140時間～230時間（韓国語副専攻コース1年次～3年次）
- ・内容：テーマ、形式ともに自由（使用必須文法などの指定なし）

本研究のために行われた調査ではなく、文章の量や文体、使用形式などにばらつきが多いので、データとして使える文章が限られる。あくまでも、先行研究の傾向を実際のデータを通して確認し、新たな課題の手がかりを探す資料として位置付けている。

表7：補足資料における「ko」と「se」の誤用

訂正例	誤用		継起・付帯状況に使用された動詞
	「ko」 68 例	「se」 53 例	
→ 「se」	42	/	拾う、する、練習する、行く、別れる、 選択する、集まる、会う、入れる、登る、 分ける、作る、移動する、買う、なる
→ 「ko」			31
→ 「a」	1	2	(省略)
→ 「nun-tey」	12	10	
→ その他	13	10	

矢印の右側には、文脈に合う適切な語形（「ko」「se」「a」「nun-tey」とその他）を示している。全体として、先行研究の傾向と同様に「ko」の誤用が「se」より多く見られた。また表に含めなかった情報として、理由・原因、手段・方法における誤用、並列の文脈における誤用が半数以上を占めている。これは、単に語形と基本意味機能を明確に学習することで回避できる類の誤用である。一方で、継起・付帯状況において「se」の使用による誤用は4種類（異なり数）のみであり、そのうち3つは再帰性動詞、残りの1例は否定形の場合である。これは前節でまとめた通りに「ko」の有標的な扱いが可能であることを支持する結果であると言える。

5. 「ko」と「se」の学習展開案

本章では、日本語母語話者の韓国語学習における「ko」と「se」の効果的な学習モデルを提案する。

前節では、先行研究に報告されている傾向を確認するとともに、手元の資料を通して「ko」「se」の誤用について調べた。その結果からは、「ko」と「se」の基本的な意味（並列や原因・理由など）を明示するだけで改善される誤用が多いように考えられる。その他、文脈理解が複雑化する継起や付帯状況においても、有標的「ko」の使用はその多くが予測可能な動詞である可能性が垣間見られた。

当該文法項目の学習方法については、これまで先行研究でも提案されてきたが、さらに工夫の余地があるように思われる。例えば、孫（2005）の指導モデルは関連する表現が多岐にわたり、運用上の細則も少々複雑である。テ形をめぐる諸現象を緻密に捉えているものの、実際の指導と学習に活用するには学習段階別に適用内容を調整して示す必要があると思われる。認識的先行（継起）という概念を「se」の最上位意味とする崔（2018a）は、並列を学習した後に継起の「ko」と「se」を比較学習する展開を提案している。しかし、二つの事象間における認識的先行の有無は、文脈が複雑になるほど判断が難しくなると十分に予測される。特に、初級段階では基本語彙数が限られており、算出する文の構造も単純である。従って、

本稿では文脈理解に負担の少なく、テとの対応関係も単純な並列、原因・理由、手段・方法の学習が先に行われるべきであると考え。事象間の関係がより複雑になる継起や付帯状況を学習段階の上位に配置することが自然であろう。

本稿でもこれと同様の考えに基づき、次のような学習展開を提案していく。

表 8：「ko」と「se」の学習展開案（初級～中級）

初級 I		個別学習
規範の提示	羅列→「ko」 ※テ形と同様に、並べた結果として順序づけも可能であることを確認	・「ko」 テ形の他に、接続助詞「シ」等を加えて説明可能
かたまり表現	「입고 있다 (着ている)」「쓰고 있다 (被っている・掛けている)」等	
初級 II		・「se」 テ形の他に、接続助詞「カラ」「ノデ」等を加えて説明可能
規範の提示	原因・理由、手段・方法→「se」	
かたまり表現	「타고 오다 / 가다 (乗って来る / 行く)」「걸어서 가다 / 오다 (歩いて行く / 来る)」等	
中級 I		体系学習
規範の提示	継起→「se」 ※例外：再帰性動詞、知覚動詞→「ko」	・日本語のテ形の体系を内省し、意味機能を理解したうえで「ko」と「se」を対応
練習用動詞	「먹다 (食べる)」「마시다 (飲む)」「보다 (見る)」「듣다 (聞く)」「알다 (知る)」等	
中級 II		
規範の提示	付帯状況→「se」 ※例外：再帰性動詞→「ko」	
練習用動詞	「입다 (着る)」「쓰다 (被る・掛ける)」「신다 (履く)」「들다 (持つ)」等	
かたまり表現	「앉아서 (座って)」「일어나서 (起きて)」「서서 (立って)」等	

初級 I と II では、並列の意味で「ko」を、原因・理由等の意味で「se」を学習し、レベルを考慮した簡単なかたまり表現⁹⁾も取り入れる。中級 I と II では、テ形を通して内省を促しながら継起と付帯状況を学習し、同時に有標的「ko」の説明を加える。このように、例外的説明を中級から導入することが学習者の負担を軽減することになると考えられる。初級から中級を通して、かたまり表現は前後する別の章に取り入れることで混乱を避ける。

本稿で取り上げた先行研究や補足資料などに見られる誤用例は、ほとんど表 8 の基準に従

うことで解決可能であると考えられる。

今回の参考資料は内容と形式にばらつきが多く、量的にも十分ではない。日本語母語話者が用いる動詞の傾向をより包括的に把握するためには、学習者の正用と誤用の両方を含むデータが必要である。さらに、学習者の発話と作文データの間には、使用動詞や誤用のパターンが異なる可能性も十分考えられる。これについては、ナム・ユンジン（2012）はすでに構築されつつある学習者コーパスや母語話者のコーパスを活用することで、作文能力や理解能力の向上が期待できるとしている。

上級に関しては、日本の学校教育課程に想定されていない場合が多く、前述したように自律的学習で上達可能であるため、本研究の対象は初級から中級の学習者とその学習内容に限定する。

6. その他、関連する項目と課題

本稿では分析の対象から除外しているが、表8からも分かるように、日本語のテ形に対応する韓国語の語尾は他にも「nun-tey」や「se」の異形態である「a」¹⁰⁾などがある。前者は前置きなどに使用されるもので、後者は様々な補助用言と接続する連結語尾である。それぞれ、次のような文脈に使用されている（表8の誤用例、以降同様）。

- (21) …라는 고등학교가 있어 (→있는데) 그 학교의 클리 클럽은 폐부의 위치였다.

iss-e (→ iss-nun-tey)

…(省略) という高校があって、その学校のグリークラブはハイブの危機にあった。

- (22) 동해도 은혜도 지금 군대에 가고 (→가) 있다.

ka-ko (→ ka)

トンへもウンヒョクも今は軍隊に行っている。

- (23) 여러분도 꼭 오키나와에 가서 (→가) 보세요.

ka-se (→ ka)

皆さんも必ず沖縄に行ってみてください。

ちなみに、生越（1987）には逆接のテ形には対応する「myen-se（ながら）」が言及されているが、それについては今回の誤用例からは確認されなかった。「ko」と「se」の学習に以上のような語形を包括的に指導するためには、まず該当する文脈を母語である日本語で内省できる必要がある。補助用言を伴う「テイル」「テミル」「テクレル」などは、初級の段階で学習される内容であり、特に「テイル」「テイク/クル」などは日韓のアスペクト体系に違いがあるため、誤用が多くみられる表現である。日本語母語話者の内省が困難なものでもあり、指導の際には特段の工夫が必要となる。補足資料から、「ko」「se」が補助用言とともに使用されている場合の誤用例の数を表9にまとめておく。

表9：補助用言を伴う場合の「ko」と「se」の誤用

誤用 訂正	「ko」			「se」		
	iss-ta	ka-ta,o-ta	cwu-ta,po-ta	Iss-ta	ka-ta,o-ta	cwu-ta,po-ta
	- いる	- 行く / 来る	- くれる / みる	- いる	- 行く / 来る	- くれる / みる
→ 「a」	20	6	3	1	1	5
→その他	50	-	-	-	-	-

表9を見ると、「テイル」形に該当する「ko iss-ta」という形式の誤用が目立つ。具体的には、「ko」の代わりに「a」を使用すべき場合が20例、その他が50例も見られる。現在進行相を表す「ko iss-ta」が「テイル」の意味範疇に部分的に対応することから、過剰汎化による誤用であると見られる。周知のように日本語の「テイル」形には複数のアスペクトが存在するが、韓国語の場合、基本的には現在進行に限定され、例外的に着用動詞（着る、被るなど）と結合して結果相状態を表すことがある。ちなみに、前述の「a」に訂正されるべき誤用の20例は、「a iss-ta」の形で結果状態を表す文脈である。次にその例を示す（すべて「a」の異形態）。

- (24) 바다로 둘러싸이고 (→둘러싸여) 있으므로 신선한 해물 음식을 즐길 수 있다.

twul-le-ssa-i-ko (→twu-lle-ssa-ye)

海に囲まれているので、新鮮な海鮮料理が楽しめる。

- (25) 발레는 서고 (→서) 있기만 하고 피곤해요.

se-ko (→se)

バレエは立っただけで疲れます。

- (26) 저는 자전거의 서클에 소속 되고 (→되어) 있어요.

toy-ko (→to-ye)

私は自転車サークルに所属しています。

また、「ko iss-ta」の中で最も多い(50例)誤用も、日本語の「テイル」形の体系に影響された負の転移であると見られる。

- (27) 그러나 일본 사람도 지고 있지 않아요 (→지지 않아요).

ci-ko iss-ci anh-a-yo (→ci-ci anh-a-yo)

しかし、日本人も負けていません (→負けません)。

- (24) 푸드도 충실하고 있습니다 (→충실합니다) !

chwung-sil-ha-ko iss-sup-ni-ta (→chwung-sil-hap-ni-ta)

フードも充実しています (→充実します)。

- (25) 이 음료 빠지고 있어서 (→빠져서) 일본에 돌아가서도 집에서 만들었어요

ppa-ci-ko iss-e-se (→ ppa-cye-se)

この飲み物にハマっているので (→ハマって)、日本に帰ってきて家でも作りました。

このように、「ko」と「se」の学習においては「ko iss-ta」「a iss-ta」と「-テイル」形の相違点を提示する必要がある。学校などの教育機関における学習では、「ko iss-ta」が先に初級に導入され、「a iss-ta」を中級以降に学習するのが一般的な展開であると見られる。まずは初級段階で「ko iss-ta」を現在進行相に限定して解説し、再帰性動詞の場合はかたまり表現として導入することも可能であると考えられる。ちなみに、既に示した表7の学習展開案でも初級に「입고 있다 ip-ko iss-ta (着ている)」を配置している。「a iss-ta」については、接続できる動詞のアスペクト性によって使用が制限されるので個別に取り上げる必要があり、ここでは扱いきれないが、本稿の内容とも深い関連がある。特定動詞が「ko」を取るか「se」を取るかを、その動詞の持つアスペクト性との関係の中で分析した研究もあり、本稿でも取り上げている(鄭 前掲)。ただ、初級・中級において学習する基本動詞の範囲を超えるため、一部の動詞類を参考にするにとどまっている。テイル形との関連のなかで、どのような学習展開が可能であり、かつ効果的であるかについて、引き続き調査していくべき課題である。

謝辞

本研究は、JSPS 科研費基盤研究 C (課題番号：21K00539) の助成を受けて行われた。

注

- 1) 大学など高等教育機関において、韓国語などの初習言語は一般的に週に1回～2回程度で行なわれる。本稿では、週2回の授業の場合を例に、初年度の前期を初級 I (45 時間学修)、後期を初級 II (90 時間学修) とする。さらに、次年度の前期を中級 I (135 時間学修)、後期からを中級 II (180 時間学修) と設定する。
- 2) 韓国語のローマ字表記はイェール式に従う。
- 3) 日本語の接続助詞に当たるが、韓国の文法用語の「連結語尾」を用いることにする。
- 4) 「持続」「付帯状況」等と同義。
- 5) 韓国語の動詞が持つ再帰性と韓国語教育における意味提示についてはイ(2012)に詳しい。
- 6) このきっかけについては、本稿の3節で触れている。継起の文脈と思われるが、永原(前掲)には継起が異なる意味機能と設定されているので、きっかけと記す。
- 7) 印(2016)、孫(2005)、キム・トンス(2011)にある誤用例や使用動詞例を参照。
- 8) 韓国語の「타다(乗る)」は自動詞・他動詞の両方に用いられる。
- 9) 「かたまり表現」という用語に関連して、第二言語習得分野において学習者ストラテジーの観点からの「ユニット形成」、又は意味的なまとまりを提示して学習を活性化する際の「チャック」という用語があるが、本稿では後者に近い意味で用いている。
- 10) 接続環境によって異形態の /a//e//hay/ が現れるが、代表形として「a」を用いる。

文献

- イ・ヨンジュン 이영준 (2012) 「한국어 교육에서 재귀성을 갖는 동사의 의미 제시 방안」 한국 언어문학 80. 335-358
- カン・ヒョンファ 강현화 (2017) 「한국어 교육 문법 항목의 담화 기능 연구」 The Language and Culture 13 (2) 27-52
- キム・ソンミ 김선미 (2017) 「한국어 학습자를 위한 -고와 -아/어서 교육 방안 고찰」 어문논총 31. 171-190
- キム・トンス 김동수 (2011) 「순서표현 연결어미 '-고' 와 '-어서' 연구」 경희대학교 석사학위논문
- ク・ジョンナム 구종남 (2016) 「독립적 '-고' 접속문의 의미 해석과 특징」 韓民族語文學會 71. 73-102
- チョン・スジン 정수진 (2011) 「연결어미 -고의 다의적 쓰임에 대한 인지적 해석」 언어과학 연구 58. 211-232
- チョン・스진 정수진 (2012) 「연결어미 -어서의 의미 확장에 대한 인지언어학적 접근」 국어교육연구 50. 405-428
- ナム・キシム 남기심 (1994) 『국어 연결 어미의 쓰임』 서광 학술 자료사
- ナム・윤진 남윤진 (2012) 「한일 대조언어학적 관점에서 본 한국어 문법학습의 과제와 코퍼스의 활용 가능성」 국어교육연구 30. 315-341
- パク・ソヨン 박소영 (2000) 「양태의 연결어미 -고에 대한 연구」 언어학 26. 167-197
- パク・チヨン 박지영 (2016) 「한국어 교육을 위한 계기의 연결어미 -고와 -어서의 교육방법 연구」 언어과학연구 78. 169-187
- ユ・ヘジュン 유혜준 (2016) 「한국어 교육 문법 항목 -고와 -아/어서의 교육 내용 연구」 어문론집 67. 317-331
- ユン・ホスク 윤호숙 (2011) 「シテ형 접속의 한국어 오역 실태 - 한국인 일본어학습자의 일한 번역문을 중심으로 -」 일본연구 47. 193-213
- 庵功雄・高梨信乃・中西久実子・山田敏弘 (2001) 『中上級を教える人のための日本語文法ハンドブック』 白川博之監修 スリーエーネットワーク
- 李熙卿 (2004) 「한국어 '-아/어서' 에 대한 교수 방안」 言語文化研究 23. 33-58
- 印省熙 (2016) 「韓国語上級クラスの二つの作文資料による誤用分析の試み 1」 朝鮮語教育—理論と実践— 11. 4-24
- 内山政春 (1999) 「現代韓国語の接続形 -어서と -고について」 朝鮮学報 173. 19-52

- 孫禎慧 (2005) 「日本語を母語とする 韓国語学習者の誤用分析」 朝鮮学報 195. 1-64
- 崔チョンア (2018a) 「韓国語テキストにおける「-eoseo」形と「-go」形について—日韓対照研究の観点からの提案—」 言語文化論叢 22. 1-29
- 崔チョンア (2018b) 「韓国語の「-어서」・「-고」形節の意味類型と統語構造：日本語のテ形節との対応関係に基づいて」 朝鮮学報 248. 1-42
- 鄭玄淑 (2001) 「I -고 III -서と動詞のアスペクトの特徴との関連性—アスペクト形式による用言分類を通して—」 朝鮮学報 180. 1-51
- 永原歩 (2017) 「韓国語の接続語尾「-고 ko」と「-아서 aseo/어서 eoseo」の誤用と習得」 東京女子大学紀要論集 67 (2) 159-183
- 仁田義雄 (1995) 『複文の研究上』 くろしお出版

引用テキスト

- 姜承恵 (2010) 『楽しく学ぶ韓国語 1 (日本語版)』 多楽園
- 姜承恵 (2010) 『楽しく学ぶ韓国語 2 (日本語版)』 多楽園
- 金京子・喜多恵美子 (2013) 『改訂版 パランセ韓国語初級』 朝日出版社
- 金京子 (2016) 『改訂版 パランセ韓国語 中級』 朝日出版社
- 盧載玉・梁貞模 (2014) 『ハングルのとびら』 朝日出版社

引用辞典

- 『標準国語大辞典』 (韓国) 国立国語院編 (2021-10-28 更新) <https://stdict.korean.go.kr/>
- 『朝鮮語大辞典』 大阪外国語大学朝鮮語研究室編 角川書店

(受付日 : 2021. 12. 10)